

現代日本
文學全集

42

鈴木

木田

三草

重平

吉集



鈴木三重吉集
森田草平集

改造社版

杉浦非水装幀

鈴木三重吉集目次

女 をんな	鳥 かき	小 こ	黒 くろ	鳥 かき	お	山 やま	千 ち	序	卷頭寫眞(照影)
.....				物 もの	みつ	彦 ひこ	鳥 どり	詞(筆蹟)	
.....		猫 ねこ	髪 かみ	語 がご	さん				
.....									
.....									
.....									
.....									
.....									
.....									
.....									
八五	七三	五七	五三	四五	三七	二一	五		

[illegible]

「森田草平集」目次

序	詞（筆談）	卷頭寫眞（照影）
.....		
煤 ばい	煙 えん	戀 こひ
.....		
二九七	四三四	四四三
初 はつ	白 じ	袈 け
.....		
袈 さ	御 ご	前 ぜん
.....		
五五八	（附）好きな文章（四四三）	年譜
.....		
五七一		

鈴木三重吉集

私は永久に夢を待つ。たゞ、
年少の時と同じ。右めに燃ゆる
こと少あるのみ。

ニ
多
金

千鳥

千鳥の話は馬喰の娘のお長で始まる。小春の日の夕方、蒼ざめたお長は軒下へ蓆を敷いてしよんぼりと坐つてゐる。干し列べた平莖には、最早絲筋ほどの日影もさしぬ。洋服で丘を上つて来たのは自分である。お長は例の泣き出しさうな目もで自分を仰ぐ。親指と小指と、そして薄がけの眞似は初やがこと。その三人ともみんな留守だと手を振る。願、奥を指して手枕をするのは何のことも分らない。藁でたばねた髪のは解れば、搔き上げて直ぐまた顔に垂れ下る。

座敷へ上つても、誰も出て来るものがないから勢がない。廊下へ出て、のこ／＼離れの方へ行つて見る。麓の家で方々に白木細を織るのが響蟲が鳴くやうに聞える。廊下には草花の床が女帯ほどの幅で長く續いてゐる。二三種の花が咲いてゐる。水仙の一株に花床が盡きて、低い階段を拾ふと、そこが六疊の中二階である。自分が記念に置いて往つた摺繪が、その儘に仄暗く壁に懸つてゐる。これが目につくと、久し

振で自分の家へ歸つて来でもしたやうに懐かしくなる。床の上に、小さな花瓶に龍膽の花が四五本挿してある。夏二月の逗留の間、自分はこの花瓶に入り替りしをらしい花を絶やした事がなかつた。床の横の押入から、赤い縮緬の帯揚げのやうなものが少しばかり食み出してゐる。一寸引つ張つて見るとさうと出る。どこまで出るかと續けて引つ張るとすら／＼とすつかり出る。

自分はそれを幾つにも疊んで見たり、手の甲へ巻き附けたりしていぢくる。後には頭から頭へ掛けて、冠の紐のやうに結んで、垂れ下つたところを握つたまゝ、立膝になつて、壁の摺繪を見つめる。「ネイションス、ピクチャ」から抜いた繪である。女が白衣の胸にはさんだ一輪の花が、血のやうに滲んでゐる。目を細くして見てゐると、女はだん／＼と繪から抜け出て、自分の方へ近寄つて来るやうに思はれる。

すると、いつの間にか、年若い一人の婦人が自分の後に坐つてゐる。きちんとした嬢さん

である。しとやかに挨拶をする。自分はまごつて冠を解き捨てる。

婦人は微笑みながら、

「まあ、この間から毎日々々お待ち申してゐたんですよ。」といふ。

「こんな不自由な鳥ですから、あゝは仰しやつてもたうとおいで下さらないのかも知れないと申しまして、しまひにはみんなで氣を落してゐましたのでございますよ。」と、懐かしさうに言ふのである。自分は狐にでもつまつたやうであつた。丘の上の一つ家の黄昏に、こんな思ひも設けぬ女の人がのこりと現はれて、さも親しい仲のやうに對して来る。かつて見も知らねば、どこの誰といふ見當も附かぬ。自分は只もぢもぢと帯揚げを疊んでゐたが、やつと、

「をばさんもみんな留守なんださうですね。」とはじめて口を利く。

「あの、今日は午過ぎから、みんなで大根を引きに行つたんですの。」

「どの畠へ出てゐるんですか。——私一寸行つて見ませう。」

「いゝえ、もう只今お長をやりましたから大騒ぎをして歸つていらつしやいますわ。」

「先刻私は誰もゐないのだと思つて、一人です

んずんこへ上つて來たんでした。」と言つて、お長が手枕の眞似をしたことを胸に浮べる。女の人は少し頭痛がしたので奥で寝んでゐたところ、お長が裏口へ廻つて、障子を叩いて起してくれたのだと言ふ。

「もう何ともございませぬ。」と伏し目になる。起きて着物をちやんとして出て來たものらしい。稍あつて、

「あなたはこの節は少しはおよろしい方でございますか。」と訊く。自分の事は何でもすつかり知つてゐるやうな口振である。

「どうも矢つ張り頭がはき／＼しません。實は一年休學する事にしたんです。」

「さうでございますつてね。小母さんは毎日あなたの事ばかり案じていらつしやるんですよ。今度またこちらへおいでになる事になりましたから、どんなにお喜びでしたか知れませぬ。……考へると不思議な御縁ですわね。」

「妙なものですね。この夏はどうした事からでしたか、ふとこちらへ避暑に來る氣になつたんですが、——私は餘り人のざわつくところは好みません。——その代り宿屋なんぞの無いといふ事ははじめから承知の上なんでしたけれど、さあ、船から上つてそこの家へ頼んで

見ると、果してみんな斷つてしまふでせう。困つたんですよ。」

婦人は微笑む。

「それから仕方がないもんだから、たうこの役場へやつて行つたんでした。くる／＼坊主です、ね、この村長は。」

「えゝ、ほゝゝ。」

「そしたらあの人が親切に心配してくれたんです。」

「そしてこの小母さんに、私は母といふものがないんだから、こんな家へ置いてもらつたらいいのですがつて、さう仰しやつたのですつてね。」

「さうでしたかなあ。とにかく小母さんを目見るとから、何かしら懐かしくなつたんです。」

「そんなに仰しやつたものですから、小母さんもしをらしい方だと思つて、お世話をする氣になつたんですつて。」

「私は今では小母さんが生みの親のやうに思はれるんですよ。私の家にゐたつて何だか旅の下宿にでもゐるやうな氣がするんですよ。」

「小母さんも青木さんはあたしの内證の子なんだかも知れないなんて、冗談を仰しやるんですよ。」

「あ、いつか小母さんが指へ傷をしたと云ふのはもう直つたのですか。」

「えゝ、只ナイフで一寸切つたばかりなんですから。」

二人はこのやうな話をしながら待つてゐる。築地の根を馬の鈴が下りてゆく。馬を引く女が唄を歌ふ。

障子を開けて見ると、薙の蜜柑畑が更紗の模様やうである。白手拭を被つた女たちがちら／＼とその中を動く。蜜柑を積んだ馬が四五匹續いて出る。やはり女が引いてゐる。向ひの、綿のやうになつた山畠に煙が一筋揚つてゐる。煙がぼろ／＼と光る。煙は斜めに横がつて、末は夕方の色と溶けてゆく。

女の人と自分の側へ寄つて等しく外を見る。山畠のあちらこちらを馬が下りる。馬は大よりも小さい。首を出して見ると、庭の松の木のはづれから、海が黒く湛へてゐる。影の如き漁船が後先になつて續々歸る。近い干潟の灰白い砂の上に、黒豆を煮したやうなのは、鳥の群が下りてゐるのであらうか。女の人の教へる方を見れば、青松葉をした／＼か背負つた頬冠りの男が、とこ／＼と畦道を通る。間もなくこちらを背にして、道に附いて斜めに折れると思ふと、その

男は最早、只大きな松葉の塊へ股引の足が二本下つたばかりのものとなつて動いてゐる。松葉の色が見る／＼黒くなる。それが蜜柑畑の向うへ這入つてしまふと、しばらく近くには行くものの影が絶える。谷間々々の黒みから、だんだんとこちらへ迫つて来る黄昏の色を、急がしい機音が招き寄せる。

「小母さんは何でこんなに遅いのでせうね。」と女の人は慰めるやうにいふ。あたりは見る内に薄暗くなる。女の人が一寸出て行つて、今度歸つて坐つた時には、向き合ひになつても最上面輪が定かには見えない。

女の人は、立つて押入から竹洋燈を取り出して、油を振つて見て、袂から紙を出して心を摘む。下へ置いた筈に何か書いた紙切れが嗅つ附いてゐる。讀んで見ると、章坊の手らしい幼い片假名で、フヂサンガマタナクと書いてある。

「あら。」と女の人は恥かしさうに笑つてその紙を刺がす。

「章ちゃんがかこんな悪戯をするんですわ。諺ですのよ、みんな。」と打消すやうにいふ。

「何の事なんです、これは。」

「ほゝゝ。」

「フヂサンいふのは。」

「あたしでございます。」

「あゝ、お藤さんと仰しやるんですか。」

「はい。」と藤さんは微笑みながら、立つて押入を探す。藤さんといふ名はかうして知つたのである。

「そしてあなたが何でお泣きになつたんです？」

「いゝえ、諺ですの、そんな事は。」

「機子を探していらつしやるんですか。私が持つてゐます。」

「あら、冗談なのでございますわ。あれは章ちゃんか……」と勘違へをしてゐる。ボケツトから機子を出して洋燈を點すと、

「まあ、恐れ入ります。」と藤さんは坐る。燈火に見れば、油繪のやうな艶やかな人である。顔を少し赤らめてゐる。

「あしが一番あん。」と章坊が着物を引つ抱へて飛び出すと、入れ違ひに小母さんが這入つて来て、シャツの上から着物を着せかけてくれる。

「さ、これを上げませう。」と下袴を解く。それ

を結んで小暗い風呂場から出て来ると、藤さんが赤い裏の羽織を披けて後へ廻る。

「そんなものを私に着せるのですか。」

「でも他にはないんですもの。」と肩へかける。

「それでも洋服とは樂でがんせうがの。」と、初やが焔爐を煽きながらいふ。羽織は黄八丈である。

藤さんのだといふ事は問はずとも分つてゐる。

「着物が少し長いや。ほら、踵がすつかり隠れる。」と言ふと、

「母さんのだもの。」と炬燵から章坊が言ふ。

「小母さんはこんなに香が高いのかなあ。」

「なんの、あなたが少し低うなりなんしたのいの。病氣をしなんすもんぢやけに。」と初やが冗談をいふ。

「女は腰のところが下袴で繋げて着るんですから。」と言つて、藤さんは側から羽織の襟を直し

てくれる。

「何故さうするんでせう。」

「みんなさうするんですわ。おや、羽織に紐がございせんわね。」

「いゝえ結構。」といふと、初やが、

「まあ、お二人で仲のいゝこと。」と言ひさま、急

にばた／＼とはげしく煽き出す。

「まあ。」と藤さんは赤い顔をしてゐる。

蜜柑箱を器で塗つて、底へ丸い穴を開けたのへ、筒抜けの鎌詰の藁を嵌めて、それを踏臺の上に載せて、上から風呂敷をかけると、それが章坊の寫眞機である。

「またみんなを玩具にするのかい。」と小母さんが笑ふ。この細工は床屋の寅吉に泣き附いてさせたのだといふ。章坊は、

「兄さんを寫して上げるんだから、よう、炬燵から出て下さいよ。」と甘えるやうに言ふかと思ふと、

「ぢきです。直き寫ります。」と、眞面目に寫眞の積りでゐる。

「兄さんは炬燵へ當つてゐる方が甘く寫るよ。」

「だつて姉さんが邪魔をしてゐるんだもの。」と風呂敷の中へ頭を入れる。

「姉さん、ぐづぐづしてると背中が寫つて終ひますよ。」

「はいく。」と、藤さんは笑ひながら自分の隣りへ移る。

「兄さん、もつと眞つ直。」

「私の顔が見えるの?」

「見えるとも、そら笑つてら。やあい。」

がた／＼と箱を揺ぶる。やがて勿體らしく身構へをして、

「はい、寫しますよ。」とこちらを見詰める。

「あら、目を閉つてるものがあるものか。……さ、寫りますよ。……只今。……はい有難う。」

と手に持った厚紙の蓋を鎌詰へ被せると、箱の中から板切を出して、それを提げて、得意になつて押入の前へ行く。

「章ちゃん、もう夜はそんな押入なぞへ這入るもんぢやないよ。」と小母さんが止めると、

「だつてお母さん、寫眞を藥でよくするんぢやありませんか。」と泣きさうな顔をする。

「それよりか寫眞屋さん、一昨日かしら寫したあたしの寫眞はいつ出来るんですか。」と藤さんが問ふ。小母さんも、

「私ももう五六度寫つた筈だがねえ。いつ出来るんだらう。まだ一枚もくれないのね。」と突つ込む。それから小母さんは、向ひの地方へ渡つて章坊と寫眞を撮つた話をする。章坊は、

「今度は電話だ。」と言つて、二つの板紙の筒を持つて出て来る。筒の底に紙が張つてあつて、長い青絲が眞ん中を繋いでゐる。勸工場で買つたのださうである。章坊は片方の筒を自分

に持たせて、しばらく何かしら言つて、

「ね、分つたでせう?」といふ。

「あ、分つたよ。」といふ。加減に間を合はして置くと、

「萬歳。」と言つてにこ／＼して飛んで来て、藤

さんを除けて自分の隣りへあたる。

「よ。姉さんもだよ。」といふ。

「よし／＼。」

「何の事ゝんです。」と藤さんは微笑む。

「今電話がかゝりましてね、……」

「あ、今言つちやいけないんだよ、兄さん。あれは姉さんには言はれないんだから。」

「何でせう。人が悪いのね。」

このやうな事を言つてゐるところへ、初やが狐饅頭を買つて歸つて来る。小提灯を消すと、蠟燭から白い煙がふは／＼と揚る。

「奥さま、今度の狐もやつぱり似とりますわいの。」と言つてげら／＼と初やが笑ふ。

饅頭を食べながら話を聞くと、この饅頭屋の店先には、娘に化けて手拭を被つた張子の狐が立たせてあつた。その狐の顔がその家の若い女房に可笑しい程そっくりなので、この近在で評判になつた。女房の方では少しもそんな事は知らないでゐたが、先達ある馬方が、饅頭

の借りを拂つたとか拂はないとかでその女房に口論を仕かけて、

「えい、この狐め。」

「何でわしが狐かい。」

「狐ぢやい。知らんのか。鏡を出してこの招牌と較べて見い。間拔けめ。」

かう言つたやうなことから、後で女房が亭主に話すと、亭主はこの邊では珍らしい捌けた男なんださうで、それは今頃始つた話ぢやないんだ、己の家の餓頭がなぜこんなに名高いのだと思ふ、などと茶らかすので、そんならお前さんはもう早くから人の惡口も聞いてゐたのかと問へば、うん、と言つて澄ましてゐる。女房は

わつと泣き出して、それを今日まで平氣でゐたお前が恨めしい、畢竟わしを馬鹿にしてるからだ、もうこれぎり實家へ歸つて死んでしまふと言つて、簞笥から着物などを引つ張り出す。やがて二人で大立廻りをやつて、女房は髪を亂して向ひの船頭の家へ逃げ込むやら、たうと面倒な事になつたが、とにかく船頭が仲裁して、お前たちも、元を尋ねると踊の晩に袖を引き合ひからの夫妻ぢやないか、さあ、仲直りに二人で踊れよ、おい、と五合ばかり取つて来た。その時の女房との條約に基いて、店の狐は翌日か

ら姿を隠して了つた。ほかの狐が箱に這入つて城下の人形屋から来て、再び店に立つたのはついでこの間の事である。今度のは大きさも顔位しかなないし、顔も少し趣を變へるやうに註文したのであらうけれど、

「なんぼどのやうな狐を拵へて来たところで、お孝ちゃん顔が元のまゝぢやどうしても駄目でがなすわいの。へゝゝゝ。」と、初やは、やつと廻りくどい話を切つてあちらへ立つ。藤さんはもう先達も聞いたから、今夜はそんなに可笑しくはないと言つたけれど、それでも矢張りはじめのやうに笑つてゐた。

話が杜絶える。藤さんは章坊が蒲團へ落した箱を手平へ拾ふ。影法師が壁に寫つてゐる。頭が動く。やがてそれがきちんと横向きに落ち附くと、自分は目口眉毛を心で附ける。小母さんの臂がちよいと寫る。簪で髪の中を搔いてゐるのである。

裏では初やが米を搗く。

自分は小母さんたちと床を列べて座敷へ寝る。枕が大きくて柔かいから嬉しいと言ふと、こ

の夏にはうつかりしてゐたが、あんな枕では頭に悪いからと小母さんがいふ。藤さんはこの枕を急いで拵へてから、仇に十日あまりを待ち暮したと話す。

藤さんは小母さんの蒲團の裾を叩いて、それから自分のを叩く。肩のところへ坐つて夜着の袖をも押へてくれる。自分は何だか胸苦しいやうな氣がする。やがてあちらで藤さんが帯を解く氣色がある。章坊は早く小さな軒になる。自分は何とはなしに寝入つて了ふのが惜しい。

「ね、小母さん。」と再び話しかける。

「え？」と、小母さんは閉ぢてゐた目を開ける。

「あの、たい藤さんはどうした人なんですか？」と訊くと、

「なぜ？」と言ふ。

聞いて見ると、この家が江田島の官舎にゐた時に、藤さんの家と隣り合せだつたのださうである。まだ章坊も貰はない、ずつと先の事であつたし、小母さんは大變に藤さんを可愛がつて、後には夜も家へ歸すよりか自分の側へ泊らせる方が多いくらいにしてゐた。はじめそこへ移つて来た翌日であつたか、藤さんがふと塙の肩骨垣の上から顔を出して、

「小母さま。今日は。」と物を言ひかけたのが元

であつた。藤さんが確か七つ八つに過ぎぬ頃であつたらう。それから四五年してこの主人が亡くなつて、小母さんはこちらへ住居をきめる事になつた。別れの時には藤さんも小母さんも泣いた。藤さんはその後いつまでも小母さん小母さんと戀しがつて、今日まで月に一二度、手紙を缺かした事はない。藤さんの家は今佐世保にあるのださうで、お父さんは大佐ださうである。

「それでは佐世保から遙々來たんですか。」

「いゝえ、あの娘だけは二月ばかり前から、この對岸にゐるんです。あなたでも同じですけれど、こんなになると、場合は全く本當の親子と變りませんわ。」

「それだのにこの夏には、あの人の話は一寸も出ませんでしたね。」

「さうでしたかね。おや、さうだつたかしら。」
「そして私の事はもうすつかりあの人に話してあるやうですね。」

「ふゝゝ、それはあなた、家では何とかいふと直ぐあなたの話が出るんですから、あの人だつて、まだ見もしない内からもう青木さん／＼と言つて、おいでになつてもまるで兄妹かなぞのやうに思つてゐるんですもの。」と章坊の枕

を直してやる。

「さつきもね、初やから、お嬢さんは存外人に恥かしがらない方だとかなんと言つてからかはれたんでせう。さうするとね、だつてあの方はもうよくお知り申してゐる方なんだものつてさう言ふんですよ。あれでゐてまだずるぶん子供やうなところがあるんですからね。」

「私だつて何だか、はじめて會つた人のやうには思へませんよ。——まだ永く逗留するんですか。」

「あの娘ですか。さうですね。……一體今度こちらへまゐつたといふのが……」

仕舞を欠と一緒に言つて、枕へ手を添へたと見ると、小母さんはその後を言はないで、それなりふいと眉毛のあたりまで埋まり込んでしまふ。しばらく待つて見ても容易に再び顔を出さない。蒲團の更紗へ有明行燈の灯が臙にさして赤い花の模様がどんよりしてゐる。

何だか煮え切らない。藤さんが今度來たのはどうしたのだといふのか。何か面白くない事情があるのであらうか。小母さんは何とか言ひかけてひよつくり黙つてしまつた。藤さんはどうして九月から家を出てゐるのか。この對岸のどんな人のところにあるのであらう。

池へ山水の落ちるのが幽かに聞える。小母さんはいつしか顔を出してすやく／＼と眠つてゐる。大根を引くので疲れたのかも知れない。小母さんの静かな寝顔をちつと見てゐると、自分もだん／＼に臉が重くなる。

千鳥の話は一夜明ける。
自分は中二階で長い手紙を書いてゐる。藤さんが、

「兄さん。」と言つて這入つて來る。
「あの只今船頭が行李を持つてまゐりましたよ。」といふ。

「あれは私のです。」と言つたまゝ、やつぱりずん／＼書いて行く。

「それはさうですけれど、どうせこちらへ運ばなければならぬのでせう？」
「えゝ。」

「ではこの押入には、下の方はあたしのものが少しばかり這入つて居りますから。あなたは當分上の段だけで我慢して下さいましな。」
「……」

「ねえ。」
「えゝ。」

「まあ一心になつていらつしやるんだわ。」といふ。

丁度一區切附いたから向き直る。藤さんは少し離れて膝を突いてゐる。

「お召し物も来たんでせう?——では早くお着換へなさいましな。女の着物なんか召して可笑しいわ。」と微笑む。自分は笑つて、袖を翳して見る。

「先刻ね。」と、藤さんは袂へ手を入れて火鉢の方へ来る。

「これ御覽なさい。」と、袂の紅絹裏の間から取り出したのは、莖の長い一輪の白い花である。

「この頃こんな花が。」

「蒲公英ですか。」と手に取る。

「どこで目つけたんです? たつた一本咲いてたんですか。」

「どうですか。さつき玉子を持つて来た女の子がくれてつたんです。どこかの石垣に咲いてゐたんださうです。初やがね、これはこの頃あんまり暖かいものだから、つい咲かれて出て来たんですつて。」

返した花を藤さんは指先でくるくろ廻してゐる。

「本當にもう春のやうですね、こちらの氣候

は。」

「暖かいところですね。」

自分はもくくと日のさした障子を見つめて、陽炎のやうな心持になる。

「私只今お邪魔ぢやございませんか。」

「何がです?」

「お手紙はお急ぎぢやないのですか。」

「さうですね。——郵便の船は午に出るんでしたね。」

「ええ、ではあとで直ぐ行李をこちらへ運ばせますから。」と、藤さんは張合が無さうに立つて行く。

「あ、この花は?」

「え?」と、出口で振り向いて、

「それはあなたにおあげ申したのですわ。」

藤さんが行つてしまつたあととは何やら物足りないやうである。たんぼくを机の上に置く。

手紙はもう書きたくない。藤さんがもう一度やつて来ないかと思ふ。ちぎつた書き崩しを拾つて、くちや／＼に揉んだのを披けて、皺を延ばして疊んで、また披けて、今度は片端から噛み切つては口の中で丸める。いつしかいろ／＼の夢を見はじめる。——自分は覺めてゐて夢を見る。夢と自分で名づけてゐる。

馬の鈴が聞えて来る。女が語るのが聞える。不圖立つて廊下へ出る。藤さんが池の側に踞んでゐて、

「もうおすみになつて?」と聲をかける。自分は半煮えのやうな返事をする。母屋の縁先で何

四かのカナリヤが、焦氣に囁り合つてゐる。庭一杯の黄色い日向は彼等が吐き出してゐるのかと思はれる。

「一寸いらつして御覽なさいな。小さな鯉かし澤山ゐますわ。」と、藤さんは眩しさうにこちらを見る。

「だつて下駄がないぢやありませんか。」

「あたしだつて足袋の儘ですわ。」

自分もそれなり下りて花床を跨ぐ。はかなげに咲き残つた、何とかいふ花に裾が觸れて、花薔の白いのがはら／＼と散る。庭は一面に末枯れた芝生である。離れの中二階の横に松が一叢生えてゐる。女松の大きいのが二本ある。その中に小さな水の溜りがある。すべてこの宅地を開く時に自然の儘を残したのである。

藤さんは、水の側の、苔を被つた石の上に踞る。水際にちらほらと三葉四葉附いた極の實生えが、眞赤な色に染つてゐる。自分が近づけば、水の面が小砂を投げたやうに痺れを打つ。

「おや、みんな沈みました。」と藤さんがいふ。自分、水を隔てて斜めに向き合つて芝生に踞む。手を延ばすなら、藤さんの膝に辛うじて届くのである。水は薄黒く濁つてゐれば、藤さんの髭す秋の色を宿してゐる。自分の姿は黒く寫つて、松の幹の影に切られる。

「また浮きますよ。」と藤さんがいふ。指すところをちつと見守つてゐると、底の水苔を味噌汁のやうに爛れて、幽かな色の、小さな鮎子がむらむらと浮き上る。上へ出て来るにつれて、幻から現へ覺めるやうに、順々に小黒い色になる。しばらく一しよに集つてちつとしてゐる。やがて片端から二三四つづ繰り出して、列を作つて、小早に日の當る方へと泳いで行く。ちらちらと腹を返すのがある。水の底には、泥を被つた水草の葉が、泥へ彫刻したやうになつてゐる。稍あつて、ふと、鮎子の一隊が水の色と粉れたと思ふと、底の方を大きな黒いのがうぢやうぢやと通る。

「大きなものゐるんですね。そ、あそこに。」と指すと、

「どこに。」と藤さんが訊く。併しそれは寫つてゐる影であつた。鮎子は矢つぱり小さく上の方に行く。自分は足元の松葉を掻き寄せて投げ附

ける。鮎子は響の如くに沈んで、爭ひ亂れて味噌汁へ逃げ込んでしまふ。

藤さんが笑ふ。

手飼の白鳩が五六羽、離れの屋根のあたりから羽音を立てて芝生へ下りる。

「あの、鳩は綺麗な鳥ですね。」と藤さんがいふ。

「あれは鳩ぢやありませんか。」

「ほゝゝゝ、あれぢやないんですの。あたしね、ほゝゝゝ。」

「どうしたんです？」

「いゝえ、あたしとんでもない事を思ひ出したんですわ。」と一人で微笑む。

「何を？」

「何でもないことです。——先達あたしがこちらへ渡つて来る途中でね、鳩が一匹、小さな板切へ棲つて、波の上をふはりくしてゐたんですの。丁度學校などにある標本を流したやうでしたわ。」

自分は氣が附いたやうに、海の方を見渡す。遙かの果に地方の山がうつつら見える。小島の蔭に鳥貝を取る船が一群帆を聯ねてゐる。

「ね、鳩が餌を拾ふでせう。」と藤さんがいふ。

「芝生に何か落ちてゐるんでせうか。」

「あたしがさつき撒いて置いたんです。いつで

もあそこへ餌を撒くんです。」

「あ、あれは足をどうかしてゐるやうですね。」初やがすたゝとやつて来る。紺の半纏の上

に前垂をしめて、丸く服れてゐる。

「お嬢さん。」

「何？」

「いゝや、男のお嬢さんぢやわいの。」

「まあ、今お着換へなさるんだわ。」

「私がどうした。」

「冗談は置いて、あなたは蟹を食べなんしたか。」

「いつ？」

「ほゝゝゝ、鳩のやうな話ね。——蟹を召し上れば買つて来る積りなの？」

「えゝ、はあ買つたのよの。午に煮ようかと思ふんですが。はあ直にお午ぢやけに。——

食べなんした事ががんすかいの。」

「食べるけど、あれは厄介なばかりで仕方がないや。」

「おいしいものですけれどね。」

「それや甘うがんすえの。それにこの頃は月が無い頃ぢやけに尙更甘いんでがんすわいの。い

いえ、ほんとでがんすて。月夜にはの、あれが自分の影に怖れてびく／＼するけに瘦せるんで

「がんすといの。」
村の水天宮様の御威徳を説く時の類附であ
る。

「ほゝゝ。」

「面白いな、それは。」

「そんなら食べなんすか。」

「食べるよ。」

「ちや、よかつた。」と、またあちらへすたくと、草履の踵へ短い影法師を引いて行く。

鳩は少しも人に怖れぬ。

自分は外へ出て見たくなる。藤さんは一人で座敷で縫物をしてゐる。一しよに濱の方へでも出て見ぬかと誘ふと、

「さうですね」と、につこりしたが、何だか躊躇の色が見える。二人で行つたとて誰が咎めるものかと思ふ。

「だつてあんまりですから。」と、稍あつて言ふ。「何が。」

「でもたつた今これを始めたばかりですから。」

「ついでに仕上げて了ひたいのですか。」

「いゝえ、さうぢやないのですけど、何だか小母さんに濟まないから。——あたし行きたいん

ですけれど。」

「では行けばいゝぢやありませんか。」

「そんな事は構はないんですけれどね、あたしこ

ちらへまゐつてから、いつも鬱いではばかりゐて、

何一つ疎にお手傳ひした事もないんでせう。」

自分は立膝をして、物尺を持つて針山の針を

こつ／＼叩いて、順々に少しづつ引つ込ませて

ゐたが、ふと叩き過ぎて、一本の針を頭も見え

ないやうにして丁ふ。幸にそれには一寸した

糸が附いてゐたので、ぐいとその糸を引くと、

針はすらりと抜ける。

「もう一月からになるのですのに、ずつと私そ

んなでしたものですから、今日は気分はいゝし、

私の方からさう言つて、これを言ひ附かつたの

ですのに。」

「構はないや、そんな事は。」

「だつて女はさうも……」と、針に糸を通す。

自分は素直に立つて、獨りで玄關へ下りたが、

何だか張合が抜けたやうで暫くぼんやりと敷居

に立つてゐる。

「兄さん。」と藤さんが出て来る。

「あそこに水天宮さまが見えてるでせう。あそこの濱邊に綺麗な貝殻が澤山ありますから、拾

つていらつしやいな。」といふ。そんなに剪まな
いのだけれど、もう、よさうとも言へないので、
干し列べた平莖の中をぶら／＼出て行く。

五六歩すると藤さんがまた呼びかける。

「あなた、お背に綿屑かしら喰つ附いてゐます
よ。」

「どこに？」

「もつと下。」

「この邊ですか。」

「いゝえ。」

「大きいのですか。」

「あ、もう一寸上。」と言ひ／＼出て来て取つて

くれる。真綿の切に赤い絹糸の絡んだのが喰つ

附いてゐたのである。藤さんはそれを手の平で

採みながら、

「いゝお天氣ですね」といふ。一緒に待つて見

たいといふ念が素振に表はれてゐる。門を出し

なに振り返ると、藤さんはまだうろ／＼と立つ

てゐる。

「お早くお歸りなさいました。」

「えゝ」と、自分は後の事は何にも知らずに、ス

テツキを振り廻しながらとこ／＼と出て行つた

けれど、二人は遂にこれが永き別れとなつたの

勿論この時には、借りた着物はもう着換へてゐた。着換へるまで自分は何の氣もなしにゐたけれど、かうして島の宿りに客となつて、女の人々の着物を借りて着たのかと思ふと、脱ぐ段になつて一種の艶な感じが起つた。何だかもう少し着てゐたいやうにも思はれた。そして、しばらく羽織の赤い裏の裏返つたのを見守つた。自分の家などでは、こんな花やかな着物の脱ぎ捨ててあることは遂に見られない。姉は十一で死んだ。その後家中に赤い切なぞは切れつ端もあつた事はない。自分の家は冬枯れの野のやうだ。とつく／＼さう思ふ。その内に不圖蛇の脱殻が念頭に浮んだ。蛇は自分の皮を脱いで、脱いだ皮を何と見るであらうかと、飛んでもない事を考へ出した時、初やがやつて来て、着換へた着物を持つて行つた。

今自分は、その蛇が血を巻いたやうな丘の小路をぐる／＼と下りて行く。一曲りづつ下りにつれて、女の歌つてゐるのが追々に鮮やかに聞き取れる。

「ねんねしなされ、おやすみなされ。鶏がないたら起きなされ。」と歌ふ。艶やかな聲である。

「おきて往なんせ、東が白む。館々の鶏が啼く。」と、丘を下りて了ふと、歌ふのは角の豆腐屋のお仙である。すべてこの島の女はよく唄を歌ふ。機を織るにも唄を打つにも、舟を漕ぐにも馬を引くにも、働く時にはいつも歌ふ。朝から晩まで歌つてゐる。行くところに歌の揚らぬ事があれば、そこには若い女がゐないのである。若い女はみんな歌ふ。そしてお仙などは一番うまい組のやうである。

お仙は外に背中を向けて豆を挽いてゐる。野袴をつけた若者が二人、畠の道具を門口へ轉がしたまふ。黒煙の煙の前に踞んで煙草を喫んでゐる。破れた唐紙の陰には、大黒頭巾を着た爺さんが、火鉢を抱へ込んで、人形のやうに坐つてゐる。眞つ白い長い顎鬚は、豆腐屋の爺さんには洒落過ぎたものである。

「をかしかし／＼檜の葉は白い。今の娘の齒は白い。」

お仙は若い者がゐるので得意になつて歌つてゐる。家に附いて曲ると、

「青木さんよう。」と、呼び止める。人並より餘程廣い額に頭痛膏をべた／＼と貼り寒いでゐる。昨夕の干潟の鳥のやうである。

「昨日来なんしたげなの。わしや丁度馬を換へに行つとりましての。」と、手を休めて、

「乗りなんせい。今度のも大人しうがんすわいの。」と言つたかと思ふと、また直ぐに歌になる。

「親が二十で子が二十一。どこで算用が違たやら。」

「よい、よい。」と野袴の一人が囁す。

横の馬小屋を覗いて見たが、中に馬はゐなかつた。馬小屋のはづれから、道の月照を無花果の木が長く續いて居る。自分はその影を踏んで行く。兩方は一段低くなつた麥畠である。お仙の歌は追々に聞えなくなる。ふと藤さんの事が胸に浮んで来る。藤さんはもう一月も逗留してゐるのだと言つた。そして毎日鬱いばかりゐたと言つた。何か譯があるものであらう。昨夜小母さんが俄かに黙つてしまつたのは、眠いからばかりではなかつたらしい。どういふ事なのであらうかと頻りに考へて見る。

後から鈴の音が来る。自分はわが考への中で鳴るのかと思ふ。前から藁を背負つた男が来る。後で、

「ごめんなんせ。」といふ。振り向くと、馬の鼻が肩のところに覗いてゐる。小走りに百姓家の軒下へ避ける。そこには土間で機を織つてゐる。小聲で歌を謡つてゐる。